

初産婦の夫が行う育児準備行動

Preparations for childcare made by the husbands of primiparas

西浦 知晶 乾 つぶら 五十嵐 稔子
奈良県立医科大学大学院看護学研究科

Chiaki Nishiura Tsubura Inui Toshiko Igarashi

Faculty of Nursing school of Medicine, Nara Medical University

要旨

目的:妻の妊娠期において、初産婦の夫が育児に関する準備行動をどのように行っているのかについて夫自身の語りから明らかにする。方法:初産婦の夫5名に半構成的面接を実施し、Modified Grounded Theory Approach の方法を用いて分析した。結果:5個のカテゴリーと16個の概念があった。初産婦の夫は、妊娠初期から後期の全期を通して、【父親役割の模索】を行っていた。【父親なりに知識を得るための情報収集】を行い、長期的な視点で子どもの成長過程を考え、子どものために安心・安全な環境を作りたいという想いで【育児用品の準備】を行っていた。また、【経済基盤の認識の変化】により、先を見据えた準備行動をとっていた。また、夫婦から家族に変化するために、妻と協力し【夫婦の関係性の中での役割再構築】を行っていた。

考察:父親モデルは変化することが可能であり、助産師は必要時に、夫婦の新たな関係を構築するための支援が必要であると示唆された。また、ネットリテラシーの観点において、助産師からの正しい情報提供は重要である。夫への保健指導実施時に、夫に関する情報収集を行い、夫婦の関係性を高める両親学級の運営が必要であると示唆された。

キーワード:父親、育児準備行動、初産婦の夫

Purpose: To clarify the childcare preparations made during pregnancy by the husbands of primiparas based on the husbands' own stories. Method: Semi-structured interviews were conducted with five husbands of primiparas and answers were analyzed using the Modified Grounded Theory Approach. Results: The analysis produced 5 categories and 16 concepts. The husbands of primiparas "explored the paternal role" throughout the entire pregnancy from the first to third trimesters. Husbands "gathered information to obtain as much knowledge as a father can," considered the child's process of growth from a long-term perspective, and "prepared childcare supplies" with the desire to create a safe and secure environment for the child. Husbands also made forward-looking preparations in response to "changes to the recognition of household finances." Furthermore, to transition from a married couple to a family, husbands worked in cooperation with their wives to "restructure their roles within the couple's relationship."

Discussion: The findings suggested that the paternal model can change and that midwives must support couples in building a new relationship in times of need. Furthermore, it is important that midwives provide accurate information from the viewpoint of internet literacy. This study indicated the need to gather information on husbands when providing husbands with health guidance and to run classes for both parents to improve couples' relationships.

Key words: Father, Childcare preparations, Husbands of primipara

I. 背景

近年、女性の社会進出や少子化・核家族化により、夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるという固定的性別役割分担意識は変化し、男女共同養育の意識が求められている。

妻の妊娠期間中に、夫から妻への精神的または道具的な関わりが欠如する時には、夫の関わりに対する妻の満足感が低下し、妻の精神的健康が障害される可能性が危惧されており(中島,2011)、妊娠期から、夫が妻をサポートすることは必要であるといえる。しかし、母親に比べ、父親は妊娠による身体的変化がないため、父性の発達が遅いことが知られている。

父親自身、産後の父親役割行動を考えるきっかけになった体験として、妊娠中に育児準備に携わる機会を与えられることによって、父親として行う育児について想像することができたという報告があり(森田,2010)、妊娠中から産後の育児について考えておくことが、早期から父性を芽生えさせるためには有効であるといえる。また、父親が育児に参加することで、母親の精神的疲労を軽減することができ(三橋ら,1999)、さらに子どもの社会性等の発達に良い影響を与え、かつ母親の育児不安の軽減や満足感をもたらすことが明らかにされていることから(榎原,2000)、父親の育児参加は必要であるといえる。

男女共同養育の意識が求められている現在、父親に関する研究は母親に比べ少なく、父親や父性に関する研究のさらなる発展が望まれ、父親自身の語りを聞くことで、今後の父親支援の在り方について示唆することができると考える。

II. 目的

妊娠期において初産婦の夫が行っている育児準備行動を、夫自身の語りから明らかにする。

III. 用語の定義

夫が行う育児準備行動:妊娠期に育児のための準備として、夫が行った行動であり、目に

みえる行動だけではなく、認知や思考も含まれる。

妊娠期:対象者の配偶者の妊娠が判明し、陣痛が発来するまで。

IV. 方法

1. 対象と研究方法

1)研究対象者

A 大学病院の院内助産で第一子を出産した初産婦の夫であった。

2)研究期間

2019年4月～2020年1月末

3)データの収集方法

データ収集は、対象者の妻の産褥入院期間中に行った。データ収集の際に、対象者及び妻に対して、再度文書及び口頭にて、研究に関する説明を行い、書面にて研究協力の同意を得た。インタビューは、プライバシーが守られる個室において、インタビューガイドを用いた半構造的面接を行った。

2. 調査内容

データの収集内容は以下の7点であった。

- 1)基本属性(対象者の現在の年齢及び結婚時の年齢、就労形態、最終学歴)
- 2)妊娠を知らされた時の気持ち
- 3)妊娠が発覚してからの気持ちの変化、夫婦から家族になるにあたっての気持ちの変化
- 4)児の誕生までに準備したこと、調整したこと、生活の中で変わったこと
- 5)妊娠中にできればよかったと思うこと
- 6)育児の情報源
- 7)自身が考える父親の役割、父親モデル

3. データの分析方法

インタビュー内容は、対象者の承諾を得て、プライバシーの守られる個室にてICレコーダーに録音した。その後、逐語録を作成し分析データとした。分析方法は木下の修正版グラウンテッドアプローチ法(Modified Grounded

Theory Approach 以下 M-GTA)で行った。

4. 倫理的配慮

対象者には、研究の趣旨、研究方法、研究への自由参加と途中辞退の権利、個人情報保護、匿名性の保証、ならびに研究以外の目的でデータを使用しないことなどを口頭と書面にて明示し、調査協力の同意書に署名を得た。尚、調査実施前に奈良県立医科大学医の倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号 2137)。

Ⅲ. 結果

1. 研究対象者の概要(表 1)

5 名から研究参加の同意を得られ、研究対象とした。対象者の概要については表1に示した。平均年齢は 31 歳(22~33 歳)であった。インタビュー時間は、平均 35 分(30~40 分)であった。

表 1 対象者の概要

対象者	現在の年齢 と結婚時の		就労 形態	最終 学歴	インタビュー 時間 (分)
	年齢 (歳)	年齢の差 (歳)			
A	20代 前半	1	正社員	高等 学校	35
B	30代 前半	0	正社員	大学	40
C	30代 前半	2	正社員	大学 院	30
D	20代 前半	0	自営業	専門 学校	35
E	30代 前半	2	正社員	大学	35

2. カテゴリーと概念について

妊娠期における初産婦の夫が行う育児準備行動のプロセスには 5 個のカテゴリーと 16 個の概念があり、それらを表2に示した。以下カテゴリーは【】で示す。

1) 父親なりに知識を得るための情報収集

【父親なりに知識を得るための情報収集】とは、父親が育児準備を行う上で、何をしたらよいかわからず、父親自身が主体的になにかしたいという思いで、その前段階の情報を得ようとする行為であり、以下の3つの概念から生成されていた。

(1) 何かしたくて知識を得る方法を模索する

妊娠発覚時より、児の出産に備えて何かしたいという気持ちがあり、父親自身で前知識を得ようと色々な方法を模索していた。

(2) つわりの時にどうしていいかわからず、情報収集を行う

妊娠初期のつわりに対する対処法がわからず困惑するが、夫なりに情報収集を行い、妻がつわりに対処しながら、日常生活を行うことができるよう工夫していた。

(3) 妻と一緒に両親学級に参加する

立ち合い分娩の準備のために、妻と一緒に両親学級に参加し、妊娠、分娩について父親なりに勉強を行っていた。

2) 産まれてくる児に対する準備

【産まれてくる児に対する準備】とは、生まれてくる児を安心、安全な環境で養育することができるように、妊娠期から父親なりに児の物品に関して情報収集を行い、丁寧に検討することであり、以下の2つの概念から生成されていた。

(4) 育児用品は安心でき、よりよいものを使いたいという思いで購入する

子どものために準備する物品は、安心して子どもに与えることができる、よりよいものを選びたいという思いで、丁寧に調べ、検討した上で購入していた。

(5) 妻と相談しながら、赤ちゃんの名前を決める

妊娠期間中に赤ちゃんの名前を妻と相談しながら、字画数などを考え、相性のいい名前を決めていた。

3) 夫婦の関係性の中での役割再構築

表2 初産婦の夫が行う育児準備行動

カテゴリー	概念
父親なりに知識を得るための情報収集	何かしたくて知識を得る方法を模索する
	つわりの時にどうしていいかわからず、情報収集を行う
	妻と一緒に両親学級に参加する
産まれてくる児に対する準備	育児用品は安心でき、よりよいものを使いたいという思いで購入する
	妻と相談しながら、赤ちゃんの名前を決める
夫婦の関係性の中での役割再構築	妻をサプライズで喜ばせるために、イベントを計画する
	家事はできる範囲内で手伝う
	夫婦の得意、不得意で家事を分担する
経済基盤の認識の変化	家族のためにお金を稼いでこないといけないと思う
	妻に心配をかけないように趣味に費やすお金や時間を減らす
	子どものために、計画的に貯金をはじめ
父親役割の模索	妊婦健診に付き添うために、自身の仕事を調整する
	自身の仕事が休みの日は、妊婦健診に同行する
	自分なりに父親モデルを模索している
	妊娠判明時嬉しかったという感情と共にしっかりとしないといけないという覚悟を決める
	エコーをみると父親になる実感が湧く

3. ストーリーライン(図1)

初産婦の夫が行う育児準備行動の基盤には、妊娠初期～後期の全期を通して、《自分なりに父親モデルを模索する》等の【父親役割の模索】があった。【父親なりに知識を得るための情報収集】を行い、長期的な視点で子どもの成長過程を考え、安心・安全な環境を作りたいという思いで【産まれてくる児の準備】を行っていた。また、【経済基盤の認識の変化】により、《家族のためにお金を稼いでこないといけないと思う》、また《子どものために、計画的に貯金をはじめ》等、先を見据えた準備行動をとっていた。また、夫婦から家族になるために、《夫婦の得意、不得意で家事役割を分担する》等、妻と協力しながら【夫婦の関係性の中での役割再構築】を行っていた。妻の妊娠を知ってから、分娩まで初産婦の夫は育児準備行動を行いながら、【父親役割の模索】していた。

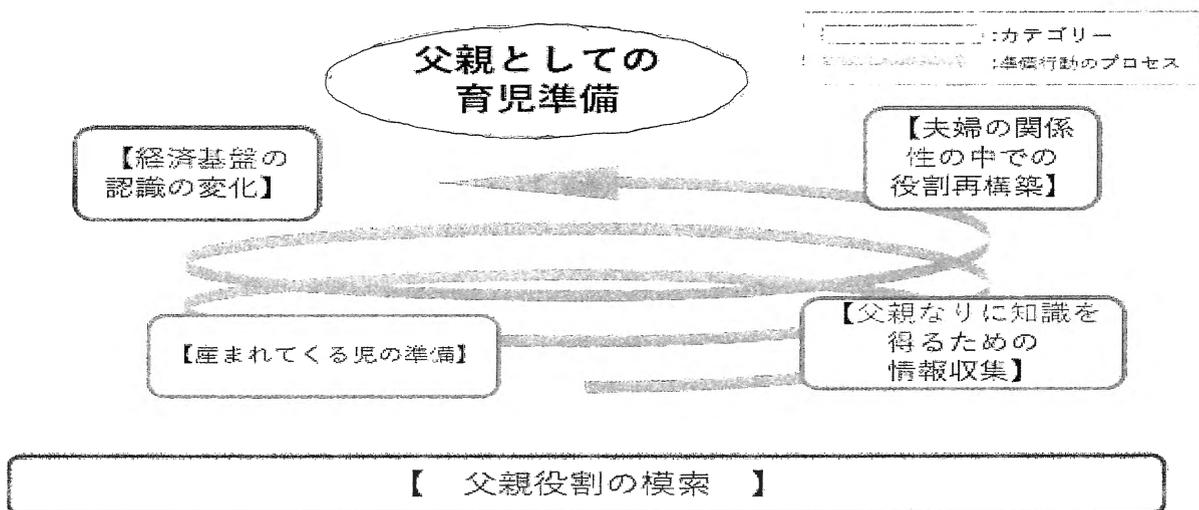


図1 初産婦の夫が行う育児準備行動のプロセス

第IV章 考察

1. 父親役割の模 索段階

父親たちは「父親モデルの形成」、「仕事への意識変容」を行いながら父親役割の模索を行っていた。

まず一つ目の、「父親モデルの形成」について、父親たちは自分の父親や身近な存在である同僚等を父親モデルにもっていた。また父親の中には映画等のメディアの影響を受け、自分にあった父親モデルをイメージしているものもいた。河本(2018)らは、父親として成長していくため、幼少期からの父親役割モデルの存在が重要であると述べていた。これは母親の世代間伝達が明らかにされているように(数井ら,2000)、父親の愛着の世代間伝達も同様に起きている為であると考えられる。

しかし、今回の研究では、自身の父親との関係性が父親モデルのすべてに影響するわけではなかった。家族形態の変化により、父親以外の同僚等、またメディアの父親モデルとの出会いがあり、それぞれが個別性のある父親モデルをもっていることが明らかになった。児の出生までの父親自身の取り巻く人間関係の中で、父親になった同僚や友人等、また父親が題材にされている映画やモデル等、実父以外とのモデルの遭遇によって、父親モデルは変容可能なものであると考えられる。

父親モデルとなるきっかけとなる人との出会いがあった父親たちは、その子どもたちに新たな父親像をインプットすることができると考えられる。

子どもは、いずれ母親、または父親になり、その親子間でも新たな親像を形成していく。助産師は父親と妊婦健診や両親学級等で接する機会を少なからずもっている。その貴重な時間を次世代に繋がる世代間循環の一時期として捉え、父親としての新たなイメージを生成していくきっかけになる可能性がある意識を持っておく必要があり、時には新たな関係構築を図る支援が必要であると示唆される。

次に二つ目として、父親たちは、父親役割の模索中に「仕事への意識を変容」させてい

た。本研究の対象者は、妊婦健診に付き添うために、仕事を調整する対象者と妊婦健診日に仕事が休みの日は、妊婦健診に同行する対象者の2パターンの父親が存在した。恒次ら(1997)は、父親固有の役割として、父親は仕事を通して家族に貢献することを第一に選択すると述べている。

本研究においても男性の生活は仕事中心であり、経済的に家庭を支えることが父親役割そのものであるという考えを父親たちは持っているということが示唆された。

仕事を調整したいという気持ちはあるが、実行には移さずに仕事中心の生活を送っている。しかし、妊娠をきっかけに、家事を行う、妊婦健診に同行する等、自ら仕事を調整し、生活パターンを仕事中心から家族との時間も大切にしたい生活にシフトチェンジしたいといった考えをもつ父親もおり、父親の中でも徐々に考え方の変化が起きていると考えられる。しかし、父親の家事、育児参加が個人の価値観や意義だけでなく労働条件、職場風土等にも大きく関係しているのは自明であり、仕事と家族との時間も大切にしたい生活を両立させるためのワーク・ライフバランスを推進する制度が企業等において、さらに運用されていく必要があると考える。父親自身が主体的に自ら働き方を選択し、ワーク・ライフ・バランスを調整することができるよう、助産師から父親に対する情報提供が必要であると考えられる。

2. 夫が行う情報収集と経済基盤の認識の変化

初産婦の夫が行う育児準備の中で特徴的なこととして、夫が行う情報収集と経済基盤の認識の変化があった。

一つ目の情報収集について、父親たちの多くは、情報収集のツールとして、インターネットを利用していた。これは、この5~6年間の間で、20~30代のスマートフォンの普及率が急速に増加しており、使用率がほぼ100%であることが大きく関与していると考えられる(厚生労働省,2019)。父親たちはインターネット上に溢れている、妊娠・出産・育児に関する情報から父親は、自分にとって必要な情報を取捨

選択し、活用するための高い情報活用能力が必要であると考えられる。ネットリテラシーの観点からも、助産師からの直接的な取捨選択された正しい情報提供はとても重要であると考えられる。

初めて父親になる男性は、妊娠や出産に関わりたいが、その知識や技術を持ち合わせていないため、初産婦の夫同士が情報交換を行える場所の提供や助産師が行う父親教室等の普及が有効であると考えられる。

二つ目の特徴は、経済基盤の認識の変化である。家族のためにお金を稼いでこないといけないと思う、妻に心配をかけないように趣味に費やすお金や時間を減らす、計画的に貯金をはじめると、産まれてくる児の父親として将来を見据え、具体的に経済的な面について考える姿勢がみられていた。Rubin(2009)は、子どもが生まれることを受け入れることは、個人的な犠牲や自我の満足をすすんで諦めることが必要であると述べている。また恒次(1997)は、経済的に家庭を支えることが父親役割そのものであると述べており、本研究の対象者においても、仕事との調整における葛藤を抱きながらも、経済的な面に関して考えることは、育児準備の一つであるという認識が大きかった。

中村(2018)は、妊娠期以降にある女性の30～40%の人が行政の支援・制度について良く知らないという現状があると述べており、これより、夫についても同様または、さらに認知度は低いと予測される。

助産師は、夫の家計・家庭の安定を担うことへの責任感が大きいという特徴を生かし、父親に接触できる機会や、経済的な制度に関する情報提供を行うことが重要であると考えられる。

3. 夫婦関係の役割再構築

児が誕生するまでに、夫は妻との関係性の中で夫婦関係の役割再構築を行っていた。つわりへの対処法がわからないが、妻の体調を心配し対処できる方法を考える、妻を喜ば

せるために妊娠中にイベントを計画する、家事を手伝う等、妊娠の全期間において、妻を労い夫婦関係を良好に保とうとする努力がみられていた。夫は、妻の性格を考慮しながら、家事を分担する等しており、各々の妻に合った精神的支援の方法を模索していた。これは医療者ではなく、夫だからできる最も効果的な支援であり、夫婦にしか分からない空気感や連帯感を取り入れた支援として重要な意味を持っていたと考えられる。

山口ら(2014)は、父親の育児のなかでも、母親の育児の苦勞を労うこと、心配事の相談にのることや母親を気遣うなどの情緒的支援行動を父親がよくするほど、母親の育児負担感は少ないと述べている。夫が妻を気遣い精神的サポートを行うことで、良好な関係性を保ち、夫婦双方にいい影響があると考えられる。保田(2012)は、妊娠中からの妻との良好な夫婦関係は、夫が父親となる発展的な展開の要であり、その後の親役割獲得に影響を与えると述べている。しかし、夫婦から、家族、親になることで、夫婦間の親密性は低下することも明らかにされている(小野寺,2003)。夫婦の関係性は、子どもが生まれ、それぞれが親になる過程で、危機に陥る可能性があり、夫婦から親への移行期に良好な夫婦関係を構築することは、とても重要であり、夫自身がその事実を認識し、行動に移すことはとても大切であると考えられる。

助産師として、夫婦が児の生活に必要な各々の役割を考え、父親自身がより具体的な生活調整をできるようサポートしていくことが求められると考える。両親学級や妊婦健診等の保健指導実施時に、妻のみではなく、夫の背景についても併せて情報収集を行い、夫の家族役割遂行状況について把握し、その上で、育児技術が中心の両親学級ではなく、妊娠、出産、育児において夫婦間の関係性を高めるような両親学級の運営が必要であると考えられる。使用する媒体などに、夫ができる妻へのサポート方法を記載するなどし、夫が自身自身の役割を明確化できるようにサポートす

ることが必要である。

4.本研究の限界と強み

本研究の対象者は、院内助産で第一子を分娩した初産婦の夫であり、立ち合い分娩を希望していた夫5人のため、妻の妊娠、出産に関心があると考えられる。また、対象者確保の為、妊娠期にリクルートを行ったことで、産褥期のインタビューまでの期間が長くなり、バイアスがかかった可能性もあると考えられる。

本研究の強みは、妻の妊娠、出産に関心が高かった対象者であったからこそ、夫自身が行っていた具体的な育児準備が明確になったことである。また、産褥入院期間中にインタビューを実施したことで、より記憶の新しい状況下での語りを得られることができたと考えられる。

第VI章 結論

1. 初産婦の夫は、それぞれが自身の父親やメディアの影響を受けながら、父親役割を模索し、育児準備行動を行っており、父親モデルは変容可能である。
2. 初産婦の夫は、妻の妊娠を機に父親なりに情報収集を行っている。インターネットが主である。
3. 初産婦の夫は、妻の出産までの過程で経済基盤の認識を変化させながら、児に安心、安全なものを購入したいという想いで育児用品の準備を行っている。
4. 初産婦の夫は、児の誕生までに夫婦関係の役割再構築を行っている。

謝辞

本研究に際して、ご多用のなか快くインタビューにご協力くださり、貴重な語りをしてくださいました研究協力者の皆様に厚く御礼を申し上げます。また研究に対し、貴重な指導を受け賜りました健康科学 心と脳の発達学専攻教授 飯田順三先生、成人慢性期看護学 教授 田中登美先生に心から感謝致します。最後に、いつも温かく丁寧にご指導くださいまし

た五十嵐稔子教授、乾つづら講師をはじめとした助産学実践コースの先生方に心から感謝申し上げます。

なお、本研究は、奈良県立医科大学大学院看護学研究科に2019年度に提出した修士論文の一部を加筆したものである。

文献

- 河本恵理,田中満由美,杉下征子他(2018):父親になるプロセス.母性衛生,58(4):673-681.
- 数井みゆき,遠藤利彦,田中亜希子他(2000):日本人母子における愛着の世代間伝達.教育心理学研究,48(3):232-332.
- 木下康仁(2003):. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践.弘文堂.
- 木下康仁(2007):ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて.弘文堂.
- 厚生労働省(2019):男性の暮らし方・意識の変革に向けた課題と方策～未来を拓く男性の家事・育児等への参画～.厚生労働省ホームページ.
http://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/kurashikata_ishikihenkaku/pdf/0310houkoku_i.pdf
- 三橋邦江,森恵美,石井邦子(1999):働く母親の適応に関連する要因の分析.日本助産学会誌,19,1-10.
- 森田亜希子,森恵美,石井邦子(2010):親となる男性が産後の父親役割行動を考える契機となった妻の妊娠期における体験.母性衛生,51(2):425-432.
- 中村康香,川尻舞衣子,跡上富美等(2018):妊娠期のセルフケア向上に役立つアプリの検討.母性衛生,58(4):600-607.
- 中島久美子,常盤洋子(2011):妊娠初期の妻が満足と感じる夫の関わりにおける夫婦の認識.日本助産学会誌,25(1):45-56.
- 小野寺敦子(2003):親になることにより自己概念の変化.発達心理学研究,2003,14(2):180-190.
- RevaRubin(2009):新道幸恵,後藤桂子(訳),ル

- ヴァ・ルービン母性論:母性の主観
的体験.医学書院:70-71.
- 榊原文子(2000):子育てと夫婦の関係.教育と
医学,48(8):43-49.
- 恒次鉄也,川井尚,庄司川頁一(1997):育児に
おける父親の役割に関する調査研究(1)-
単純集計と両親の比較をとおして- .愛知
教育大学研究報告,46:105-113.
- 山口咲奈枝,佐藤幸子.(2014):育児行動の促
進を目的とした父親学級プログラムの介入
時期別にみた効果の検討.母性衛生学
会,54(4):504-511.
- 山口咲奈枝,佐藤幸子,遠藤由美子(2014):未
就学児をもつ父親の育児行動と母親の育
児負担感との関連.母性衛生,54(4):495-
503.
- 山内弘子,高間静子,林宏美(2016):妊婦に対
する夫の役割行動実践度測定尺度の開発.
母性衛生,56(4):599-608.
- 保田ひとみ,畑下博世.(2012).妊娠初期から産
後1か月における初めて父親となる夫の体
験.家族看護研究,17(2):52-63.